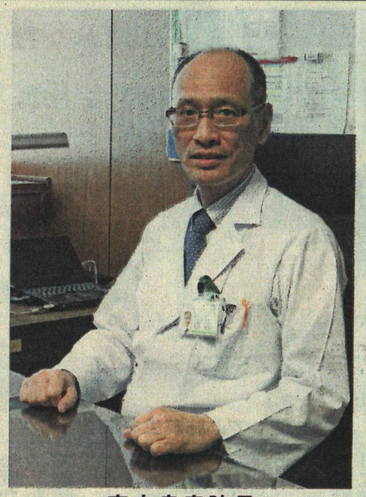
38億円余と6年の歳月投入
和歌山病院新病棟完成

災害に強い地域密着医療病院へ



南方良章院長

4月10日(日)開棟

総工費38億3000万円と6年の歳月をかけた、独立行政法人国立病院機構和歌山病院＝美浜町和田、南方良章院長＝の新病棟が竣工した。新病棟は、近い将来高い確率で起こるとされる南海トラフ巨大地震を見据え、万全の防災対策を整備。有事の際には、患者の安全はもちろん、地域住民の安全確保にも配慮された造りとなっている。

新病棟は、一般病棟2棟、一般結核混合病棟1棟、重心病棟1棟の、上空からみて東西にH型の構造。県の津波浸水想定に沿い、1階部分を5㍍の高さの橋脚だけで上階を支える建築（ピロティ）とし、2階から4階部分に重心160床、結核15床、一般130床の計310床を配置。5階は重心患者の療育訓練場のほか、地域の避難者1600人（1人あたり2㎡で算出）を受け入れられる避難場所を備えた。

建築・耐震基準は一般的なものよりレベルの高いものに沿い、自家発電機や貯水槽は、強固な特殊構造のものを設置。今夏までには、ヘリポートも設け、万全の防災体制を整える。

テープカットで竣工を祝う

入浴介助器具について説明を聞く

安心と信頼いただける施設に
100人列席竣工を祝う

竣工記念式典は3月28日、院内で開き、国立病院機構本部役員ほか柏木征夫御坊市長、森下誠史美浜町長、工事関係者ら約100人が竣工を祝った。

南方良章院長は、病院の歴史と理念、新病棟の防災機能を紹介し「風光明媚な林内には、役場や小中学校、支援学校、自衛隊などが立地しているなか、和歌山病院は防災、医療の安全ゾーンの中心的役割を果たせるものと期待している」と関係者への感謝と地域貢献への決意を述べた。

仁坂知事からは「地域の中核病院として働くと期待している」とのメッセージ。森下美浜町長や柏木御坊市長も祝辞を述べた。

独立行政法人国立病院機構本部の桐野高明理事長からは「地域の連携のもと、日々変化する医療ニーズに応えながら大きく貢献していくことを期待したい」とのメッセージが寄せられた。

南方院長は、関係各位に感謝状を贈呈。閉会の辞のなかで駿田直俊副院長は「ハードだけでなく、人やチームというソフトのほうが大事なことは重々承知しています。みなさまから安心と信頼をいただけるよう努力していきたい」と述べた。

テープカットで竣工を祝った後は、参加者らが新病棟を内覧。南方院長ほか病院スタッフらから説明を受けながら、一般病室、結核病棟、重心患者の療育訓練場、屋上避難場所などを見てまわった。

結核菌を結核病棟から出さない出入口の仕組みについて聞く

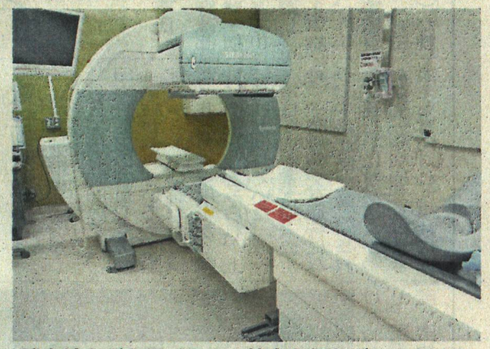
屋上避難場を見学

関係者約100人が列席

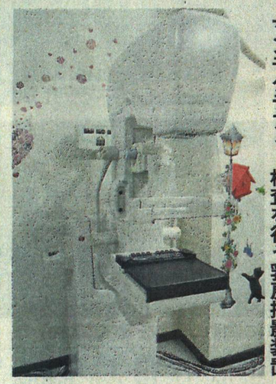
呼吸器内科を中心にニーズに応じた治療を提供

県内に呼吸器を専門とする医師が少ないなか、和歌山病院は呼吸器内科に6人の医師を置き、外来ではぜんそくやCOPD、入院では肺がんや肺炎の患者を多く診察・治療。他にも、睡眠時無呼吸症候群や呼吸不全、結核など、さまざまな肺疾患患者を受け入れている。

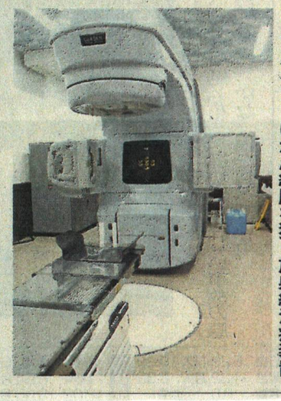
ほか、乳がんや放射線治療、神経難病にも注力。ピンポイントにがん細胞を狙う放射線治療装置や、脳血流などを調べるRI検査を行うガンマカメラ、マンモグラフィー検査を行う乳房撮影装置など高性能な治療・検査機材を備え、充実した地域医療体制を備える。



脳血流などを調べるＲＩ検査を行うガンマカメラ



マンモグラフィー検査を行う乳房撮影装置



ピンポイントにがん細胞を狙う放射線治療装置